

【第1部】



1815年→1949年

山口大学の原点

創基から山口大学設立までの歩み



特別
寄稿

1

わが青春の ケイセン講堂

古川 薫

Profile

古川 薫 ふるかわ かおる

1925年、下関市生まれ。作家。1952年、山口大学教育学部第二中等教育科修了。教員、山口新聞(みなと山口合同新聞社)編集局長を経て、文筆活動を始める。1991年に、下関市出身のオペラ歌手藤原義江を描いた『漂泊者のアリア』で、第104回直木賞を受賞。維新史と長州藩に関わる歴史小説のほか現代小説、海外紀行など多数。主な作品は、『正午位置』『幻のザビーネ』(文藝春秋)、『毛利元就』(新潮社)、『斜陽に立つ』(毎日新聞社)、『吉田松陰一留魂録』(講談社学術文庫)など。



ケイセン講堂

かつて天才少女ヴァイオリニストとして、ヨーロッパ人の心を奪った美貌の諏訪根自子が、戦後帰国、山口市のケイセン講堂で演奏したのは、1948年の春だった。ケイセン講堂とは、山口大学経済学部的前身、山口経済専門学校（山口高商）の講堂のことだ。独立した瀟洒なこの建物は、かなり長期にわたり山口市の公会堂の役目を果たした。

戦後、帰国した諏訪根自子が、ナチスのゲッベルスから贈られたと噂されるいわくつきの名器ストラディヴァリウスで奏でたそのときの曲が何であったかを僕は知らない。その演奏会場への入場を拒絶されたからである。

山口市駐屯の占領軍主催によるこのリサイタルの聴衆の大半は碧眼の軍人であった。よれよれになった旧日本軍の軍服をまとうっそりとあらわれた復員兵の僕が、受付で「駄目だ」と胸を突かれたときの悲哀と敗戦国民の屈辱を忘れ得ないが、ケイセン講堂の入口に整列して出迎える占領軍高級将校たちと鷹揚に握手をかわし、颯爽と中に消えていった若い日本人女性の姿が、僕の脳裏にあざやかに焼きついた。

戦争の世紀初頭の1925年、諏訪根自子より3年遅れて、彼女とは月とスッポン違いの境遇に生まれた僕の運命は、いわば当然のごとく軍国少年としての出発だった。日中戦争が始まったのは小学5年生のときであり、旧制の県立宇部工業学校機械科を卒業して、「赤トンボ」の愛称で知られる海軍93式中間練習機を作っていた東京の日立航空機株式会社羽田工場に入社したのは、太平洋戦争勃発の翌年だった。



ケイセン講堂の内部

東京大空襲で軍需工場が壊滅的被害を受ける直前、兵役に取られ兵庫の航空隊で敗戦を迎えた僕は、職も目的も失った20歳の春秋を無為にすごしていた。おそらくは新しい就職口をもとめて、県庁所在地の山口市に行ったそのとき、占領軍将校に対する諏訪根自子の誇りにみちた姿を目撃したのだった。民族・国境を越えた芸術というものの正体に搏たれたその瞬間、工業専門学校進学を志していた僕の目的は急旋回した。

1950年春、山口大学教育学部に入学した僕は25歳、大学教育を受けてみたいという僕と同じ懸命の気持ちを抱く年嵩の学生がほかに2名いた。T君は小学校教員の経験を持ち、僕より1つ年上、M氏はすでに30歳の元陸軍大尉、南方から復員、士官学校出身の彼は戦犯容疑でいったんは巣鴨拘置所に収容されたが、無罪放免されたのち一念発起して新制の大学に入ってきた。この長身の剣道マンを、僕たちだけでなく教授の一部までが「キャプテン」とよんで親愛した。画家志望のT君はクラシック・ファンで、下宿先にポータブル蓄音機とたくさんのSPレコードを持ち込んでいた。僕がベートーヴェンに入れ込んだのは彼の影響である。

他の学生たちから「年寄り組」などと呼ばれることもあったが、晩学の僕らは戦争で奪われた青春を取り戻した思いで、角帽をかぶり若い人々にまじって精一杯生き生きと活動した。大学祭では演劇の裏方として参加し、合唱団「メンネルコール」の一員にまぎれこんだりもした。

思い出深いのは映画鑑賞会「若葉会」のことである。若葉会については山口大学経済学部第1回卒業生の松野浩二氏が著書『奮発振動の象あり』に詳しく触れておられる。若葉会の創設は

1946年で、当時の山口高等商業学校の学生が、終戦直後の殺伐とした空気の中で始めた文化運動が映画鑑賞の若葉会だった。

映画館にも劣らない映写装置が高商時代からの講堂には残されており、映写技師もまだ庶務課に在職していた。入手困難だったアーク・カーボンを探し出し、フィルムは大阪の配給会社からの提供にこぎつけて、経専のちには山口大学、市内の高校生を中心とする会員制でスタートした。アメリカ映画は貸出しが禁止されていたので、主としてフランス映画と日本映画を上映した。組織も定着して、上映日には講堂が満員になる盛況だった。僕にとってこのケイセン講堂は、入学式の会場、さらにはあの諏訪根自子リサイタル以来、大げさに言えば自分の運命を変えた記念すべき劇場だったのだ。後年に至っても鑑賞の機会がなかったコクトーの『賭けはなされた』や、デュヴィヴィエの『我等の仲間』などフランスの名画を観たのはこの若葉会であった。(その後、僕は映画『我等の仲間』を翻案した同じ題名の短篇を「小説新潮」1998年1月号に書いている)

大学祭の演劇

田中小太郎作『道化の歌』

於経学部講堂(ケイセン講堂)1951年



【III】 道 化 の 歌

STAFF

演出	福永 芳久
脚 本	古 川 薫
監 査	中 泉 敏 克
助 演	伊 村 喜 久 夫
美術	多 田 英 雄
衣裳	時 岡 美 津 子
扮 装	岡 道 子
照 明	武 安 保

CAST

原 田 千 代 子	入 江 清 子
弟 一 郎	上 田 常 雄
弟 信 吉	杉 本 周 治
妹 文 江	竹 内 加 代 子
姉 田 部 三 枝	小 山 節 男
娘 の ぶ 子	岡 道 子
連 見 ゆ き	森 本 武 子
齊 藤 喜 作	佐 々 木 幸

大学祭の演劇パンフレットより(1951年)

僕ら「年寄り組」は教室で教官の講義を聴くことに喜びを感じていた。一言半句も聴きのがすまいと貪婪なまでにノットした。それが親の仕送りでのんびり“遊学”している者たちとの違いであった。文字通り乾いた砂地に染み入るように講義の内容は僕らの脳髓を充たしていったのだ。物書きを業とするようになって、ソビエト連邦に取材旅行したとき(『不逞の魂』新潮社刊)国土の至るところで幾何学模様の野外彫刻を見て帰ってきた。間もなくソ連崩壊の報に接し、すぐさま僕はK先生から聴いたヴォリンゲルの『抽象と感情移入』にある空間恐怖説を思い出した。崩壊の危機を感知したロシア人の深層心理とあの幾何学模様の野外彫刻をむすびつけたエッセイを新聞に書いたものだった。

「教養とは連想の拡大である」とは、たしか小林秀雄氏のことばだが、僕にとって連想拡大の原

点はまさしく山口大学だった。いつごろからか国立大学を入試の期日によって一期校、二期校と格付けするようになった。旧帝国大学クラスが一期校で、山口大学は二期校だった。官僚として出世したい者は東大に行けばよい。そうでなければ要するに大学はどこでもよいのである。

僕は学歴、門閥を問わぬ文学の道に入って、自分の好きな方向をめざし、あまり励みもせず、怠けもせず、楽しんで刻苦した。そして一応の関門を突破した。直木賞は芥川賞に比べれば二流だが、「それでいいのだ!」。これは赤塚不二夫のマンガ『天才バカボン』のおやじのセリフだが、Es ist gut! は、カントのダイニング・メッセージだとは『純粹理性批判』を講じたO先生が雑談で教えてくれた出色の名台詞で、僕の第二座右銘である。

ところで「卒業す学の鉄鎖の重かりしよ」とは、中村草田男が詠んだ句だが、僕は草田男の句集にこの作品を見つけたとき、のしかかってくる学業の負担とは別に、なにか学生に覆いかぶさるかび臭い重圧が漂っていて、軽い脅えを感じさせるものが大学にあったことを思い出した。「学の鉄鎖」とは、あるいはそういうものを表現しているのだと理解した。尤も草田男が出たのは旧制の東京帝国大学だから、地方の新制大学とは比ぶべくもない“象牙の塔”の質量があるのだろうが、わが山口大学にも封建時代をふくめた藩学数百年の蛍雪で艶光りするそれなりに重厚な個性を帯びた「学の鉄鎖」は残存し得た。

文久3年(1863)4月藩校明倫館は、萩藩が本拠を幕府に無断で山口に遷す藩政大改革と前後して、事実上山口に移し、教授陣もそれに同行した。山口に早くから教場を拓いた上田鳳陽の山口講習堂(山口講堂改称)と三田尻講習堂を明倫館の直轄としたのは、萩藩主が山口に居館を遷す4年前の1860年11月のことだが、それは大老井伊直弼暗殺後にわかに幕府への対抗姿勢を藩があらわにした時期であった。

5代藩主吉元の改革政策によって享保4年(1719)米沢藩の興讓館と並び、全国にさきがけて創設された伝統の藩校明倫館が、山口の新天地にあらためて文教の中心を据えたのだ。上田鳳陽は藩学中興の祖ということもできる。

さて、僕が入学した当時の学長は地球物理学の泰斗として国際的に名を馳せる松山基範先生だった。教育学部長は岩波書店から大冊『吉田松陰』を出した玖村敏雄先生だったが、この人から吉田松陰の講義を受ける機会はついになかった。残念というほかはない。

当時、文理学部には中国文学の吉川幸次郎先生や中世史の福尾猛市郎先生もおられたがこれも受講は逸した。しかし師とすべき人はかならずしも著名な人物である必要はないのだ。問題は学ぶ側にある。学んでいかに自分のものを創り出し、いかに連想を拡大するかだろう。しかしながらその後、維新発祥の地とされる山口県の山口大学に、維新史乃至は吉田松陰研究の国内最高の権威とされる学者が定着しないのは不思議ともいうべく、これはひとつの課題である。

最後に思い出にのこる先生を2人。まず国文学のK先生は僕が行き詰まり筆を投げ出そうとしたとき、「無能無才にしてこの一筋につながる」という芭蕉『幻住庵記』の言葉を引用して叱咤、無気力な僕を立ち直らせてくれた恩師である。これが僕の第一座右銘だ。

もう1人はある個性的な教官の思い出である。教育学部の構内に「時雍」の2字を深く彫り込んだ石碑があった。僕らがその前に立って「どういう意味だろう」と話しあっているところへ通りかかった少し頭の禿げた教官らしい人が、「それはねえ、ジヨウと読む。平和ということ。書経にある言葉だ。コレ安ラカナリ、と訓読する。ええかね、分かったかね」と、言い捨てるようにして行ってしまった。

漢文『古文真宝』の講座が始まり、教室で待っていると現れたM助教授がその人だった。僕らは指定された教科書を用意していたが、先生はそれを手にしていない。先秦以後宋までの詩文



時雍碑



山口にて(1950年)

20巻をすべて暗記しているという恐るべき碩学だった。この人からはほかに世阿弥の『風姿花伝』を受けたが、すべて口伝調の講義だった。

M先生の最終学歴は尋常高等小学校という。あとはすべて独学と検定試験で、師範学校の教官となり、横すべりで大学に移った。すでに定年近い年齢だが「万年助教授」なのは、その経歴のせいだという。学歴偏重の理不尽を感じさせることだった。M先生の講義は突然低俗な世間話となり、「あのなあ、世の中でいちばん偉いのは私ら大学の先生ですよ」などと言ったりする。この人の深い学殖に畏敬の念を抱く反面では、僕自身の俗物性を棚にあげ、その知性の香りのなさに辟易して微苦笑させられることしばしばであった。青年時代、大学キャンパスの洗礼を受けていない人、「学の鉄鎖」の権威に脅えた経験のないことからのスノビズムといえるのかもしれない。たといわずかな期間でも「最高学府」の空気に身をひたしておくこと、「学の鉄鎖」の洗礼を受けておくことが大事なのだということを、反面教師として実感させてくれたのはM先生だった。なつかしい恩師のひとりである。

キャンパス生活の収穫は知識の吸収とは別に、この「学の鉄鎖」を体感することだと僕は思っている。大学に入ってからに勉強もせず、自動車クラブで車の免許をとったり、遊びに夢中の学生を少なからず見たが、「学の鉄鎖」の臭いを嗅いだだけでも、無意識のうちにその人間の形質は影響を受けているのだ。

短い期間ではあったが、僕の青春は山口大学のキャンパスの中で全開したのだった。社会人生活を捨てて、冒険心を抱き飛び込んだ学巢に澱むある種の権力臭に脅えもした。僕にとっての「学の鉄鎖」が、自分の運命を強引に折り曲げ、予期せぬ方向に突き放してくれるかもしれないという期待もあったが、それは遂げられたと思っている。

わが青春のケイセン講堂は、キャンパスの吉田移転によっておよそ1世紀の歴史を閉じた。今そのあとには県立美術館の建物が載っている。